

奥南部漆物語

漆生活ごよみ

自然の恵みを生かしながら
生きるための知恵を
自らつくりだす

奥南部に住む人々は古の時代より四季折々に姿を変える自然と向き合い、生活を営んできました。安比川流域では、自然の恵である漆を活用した生活文化が根付き、木地づくりから漆塗りまで漆器製作を流域で一体的に行うなど、漆を活用したものづくりの文化が育まれ、日常生活の中に溶け込み、今日まで継承されてきました。

このカレンダーは、春夏秋冬を通じた地域の漆・自然との関わり、そして、人々の漆生活文化の移ろいをこよみにしたものです。

漆と生活

いつの時代にも人々と共にあった漆。その樹液は漆器や建築資材の塗料として、丸太はアバギ(浮子)や薪として、木の実や蠟そくや艶出しとして利用されてきました。そして、漆器製作の技術は今日まで受け継がれ、さらに、漆の花から蜂蜜を、漆の実からコーヒーをつくり、丸太から新たな商品開発の可能性を検討するなど、漆を活用した生活文化は今でも広がりを続けています。



漆器と郷土料理

安比川流域で作られてきた漆器は、普段使いの生活漆器と言われます。それは、野良仕事から冠婚葬祭まであらゆる場面で用いられ、その土地ならではの料理が盛り付けられてきました。かつて北大路魯山人は、料理と食器は夫婦のごとき関係にあると表しましたが、安比川流域で生まれた漆器と郷土料理は、今日も人々の日常生活に寄り添い、その食生活にこの地域ならではの豊かなさをもたらしています。



漆器と地酒

昔から漆器とお酒は切っても切れない関係にあります。かつて、安比川流域の家庭では、自家製のどぶろくを作り、漆塗りのひあげ(片口)に入れ、こぶくろを使って飲み、楽しんでいました。それは、「酒遣舞」という地域に受け継がれてきた神楽にも見ることが出来ます。地域の伝統技術で作られた漆器に地域の自慢のお酒を注いで飲めば、この地に育まれてきた一味違った漆文化を味わえるかもしれません。

※酒遣舞とはこぶくろを渡し、振る舞うまでの器と舞にしたもの。

*気象情報は平年値(気象統計情報による)

